動によって集められる資料等を編集し、五十三年五月には、第三巻（生活資料編㈡）として、明治・大正・昭和二十年までの歴史的記録の集大成（四〇〇頁）を発行予定しているのである。

このような編集行事の他にも、宗教的行事である歌題目の五十年ぶりの復活、区内の地域信仰としての道祖神、地神塔等の修復や再建等に助言するなど、間接的行動による成功例は数多く実現した。

五十二年一月をもって発足以来満三歳の至って幼ない組織で運営されており、今日までの短かい期間に次から次へと行動が出来たということは、会員一同の直向きな郷土愛から生れた一致協力のたまものと、会の一員ながら深く感じている次第である。

本会がいちばん大事な仕事と考えているものは、発見された資料を、どう保存したらよいかという問題である。民俗展開催のための資料探しの過程で、区役所の金子社会教育主事を交えた会員の間では、続々と発見される貴重な資料を再び土蔵の中に眠らせること、またもし紛失、焼失等があった場合など、再現不可能な物だけに、なんとしてもこれを後世に伝えるような保管方法をと、色々と話題になった。しかし開催準備に慌ただしく、具体的な協議に至らなかった。

開催中も横浜市文化財課の職員の方が参観に来られ、資料の保存方法等について叱声にも似た注意を受けたことがあった。この居丈高とも聞えた職員の熱心な声に対し、反発するほどの実績のない会を、当時染々と感じたのであるが、この郷土文化財の保存問題は決して諦めることのない、現在も会の最大の課題とされているのである。

だが、関係当局が指摘するような保管のための資料館建設となると、行動力はあっても財力にとぼしい小さな民間団体としては、どのような方法をもって対処したらと常に答に窮するわけである。資料を一堂に集めることは理解と協力によって実現できるが、収納する建物となると土地代、建築費と数値は思考力を鈍らせるのである。

何回かの空論も重ねたが、理想の実現のためには本年度は何んとしても前進したいものである。このためには区内諸団体の衆知をまず集める運動をと考えるが、関係行政も言放つだけでない暖かい手をと希望する次第である。

地場産業

経済局中小企業指導センター　技術指導係長　渋谷晴男
技術吏員　赤堀郁彦

地場産業の現況

市庁舎二階の貴賓室に入ると、貝で模様を象嵌した大きな衝立が目にうつる。これが横浜の伝統的な工芸品である芝山漆器である。横浜にはこのほか元町クラシック家具、スカーフなどの地場産業がある。芝山漆器は横浜開港以来の伝統的なものであるが、終戦を境にして輸出面での製品が粗悪化し、現在では細々と生産している。また、元町クラシック家具は横浜に住みついた外人から技術を学び、その後、洋家具の発祥地として栄え元町周辺を中心として製造販売をしている。しかし終戦後職人が少なくなり、また手仕事のため生産規模も小さい。反面スカーフは十数年前までは髪の毛を風から守るくらいしか考えていなかったが、最近はファッションブームとともに服飾のアクセサリーとして定着してきた。業界も国際商品としてデザインの流行や、品質向上にしのぎをけずっている。

芝山漆器の歴史と技術

横浜の芝山漆器は横浜開港とともに発達した。一八五八年日米修好通商条約が結ばれ、そのとき開港場の一つとして横浜村が加わった。その後は幕府の全力投球によって開発され、間もなく日本の貿易港として生まれ変り、多くの外人貿易商なども横浜に住むようになり必然的に貿易商品の拡大がなされ、芝山漆器も外人の好奇心に訴え盛んに輸出された。

象嵌細工は奈良朝時代から既に見られたが、芝山漆器は一八〇〇年代に芝山宗一という人によって始められ、後に芝山宗明、真陵済易政などに受け継がれ、次第に芝山漆器の完成に近づいた。

当時は江戸で芝山漆器を製作し、横浜へ来ては露天などで商売をしていたが、現在のように交通が至便でないため、次第に横浜へ職人が移住し、本格的に芝山漆器を始めた。貿易も盛んになり、明治から大正にかけては蒔絵師五〇軒、塗師一〇〇軒、木地師五〇軒、彫込師五〇軒等の多くの工人が横浜に住み、芝山漆器の黄金時代を築いた。

芝山漆器は象牙材を主に、貝（蝶貝・淡貝・あわび貝・夜光貝）珊瑚等を漆の中に彫り込んで模様を作り、屏風・衝立・飾額・棚等の装飾細工として使用された。工程としては人物・鳥・花などの下絵を描き、それに合わせて貝、象牙材などを形取し、その上を線彫り・色付け（茶こう・青竹・硫黄・食紅等）して形が出来あがる。完成した模様を漆面に刀で彫込み、仕上げる方法を彫込み式と言い、また別の方法としては「よせ貝」と

言って木取りの上に貝・牙類を一片一片張りつけて寄せ集めて模様を作り、それを漆面に張る方法と、「ひら」と称して、貝・牙類を平面に一枚一枚張りつける方法もある。

このように芝山漆器を作る場合、木地師から塗師を経て芝山師、彫込師等の分業によって製作されるために、非常に長い期間と熟練した技術を要するため、貿易商品としては非常に値がかさみ、特に昭和に入ってからは、製品にも安い物が出まわり、象牙から牛骨等に落した芝山漆器となった。

太平洋戦争から終戦にかけて横浜にいた職人も四方に散り、現在は輸出ものを中心に少人数の人が製作している状態である。

元町クラシック家具の歴史

元町家具の発展も横浜開港によってなされた。横浜市史稿によれば、英国人ゴールマンが元町の製画業者箱安および馬具安に形を示して製作させたのが始めとされている。

その当時馬具安は馬具づくり、それも皮革縫製を専業にしていたから、ゴールマンによって家具づくりの手ほどきを受け、その後は洋式椅子の座の革張りやベッド等も手がけていた。そのころ外人居留地に居を構えていた人達が商人を相手に椅子に腰かけて品物を買ったり、西洋家具の修理を出したりして、必然的に西洋家具技術を身につけていった。

様式としてはフランスのロココスタイル、イギリスのジャコビアン、ヴィクトリアンスタイル、アメリカのコロニアルスタイルなどをこなしていた。

明治三十年代には職人達三〇余名が組合を結成し、手間賃の値上げを行い、当時の職人意識が如何に高かったかを物語っている。

大正時代に入ると輸出家具も乱造され、横浜の家具は次第に衰微し、職人も東京へと移住していった。しかし大正中期に東京から逆に横浜へ来て、沈滞していた元町家具を再び盛りあげた富沢市五郎は特筆すべき人であった。このようにして一時的には再興したが、その後昭和に入り戦争、終戦へと続き、元町クラシック家具も壊滅的打撃を受け、戦後は進駐軍相手の家具修理等を行ってきたが、最近は元町ブームと手造りの良さで少しずつではあるが元町クラシック家具として名をあげてきている。しかし業界自体は深刻さを増している。

スカーフのおいたち

横浜におけるスカーフ産業の興りは、明治六年ウィーンで開かれた万国博覧会に絹織物を出品したのが契機となって、羽二重・縮緬の手巾（ハンカチーフ）等が生産されるようになったのが今日のスカーフ産業の基礎となった。明治二三年に木版による柄手巾（ハンカチーフ）の生産が始まり、同三十五年に秋山捺染工場で型紙を使用した摺込み捺染に成功、大正二・三年には染料に糊剤を混入して色相に厚さを加えたいわゆる友禅染に近い方法が考え出されるなど、当時としては画期的な技術開発がなされた。第一次世界大戦の影響で大正七・八年には横浜の染色捺染工場も六〇余に及んだ。しかし大震災で二、三の工場を残して全滅に近い災害を受けたが、翌十三年には主な工場が再建され、好景気と輸出の伸びによって昭和三年頃には六二工場と再び横浜の主要産業となった。しかし第二次大戦と共に輸出の道は全く閉され、企業整備、戦災により再び壊滅的打撃を受けた。

戦後昭和二十二年貿易再開と同時に輸出製品の生産が始まり、昭和二十三、四年には二〇余工場が復興した。スカーフ等の輸出振興を図るため、印度商社の招致、デザインや生産技術の改善、水洗仕上共同施設の設置等、県・市・業界一体となって捺染業界の振興に努めた結果、現在では捺染工場一〇七社（市内八六社）捺染台八五九面、自動捺染機三三台、昭和五〇年の捺染加工数量はスカーフ類一、一三〇万ダース、ピース類（捺染服地等）三、九三七万ヤード、染色加工賃一七三億円、スカーフ類の輸出は一〇、〇〇〇万ダース（全国比六八％）一六七億円（八七・五％）に達しているが、昨年八月を境に内外需とも景気にかげりが現われてきた。

地場産業の問題点

個々に伝統的地場産業を羅列してみたが、スカーフ以外は最盛期に比べ衰微の一途をたどっているのが現状である。

横浜は開港後わずか一二〇年の歴史しかないため、伝統的産業は少ないので、横浜の特質を生かした新しい産業の芽を育てるとともに、現存する伝統産業の灯を消さないよう行政面からの指導育成が必要である。とくに芝山漆器、元町クラシック家具については、技術者が少ないため、その養成、製品開発、流通問題等を早急に解決することが緊急の課題となっている。また、最近工芸に関係する若い人たちが新しい地場産業と横浜文化について積極的に活動を行っている。彼等の今後を期待したい。

参考文献「神奈川県美術風土記」